書評「生態学研究ハンドブック　問いの立て方から，仮説検証，研究成果の伝え方まで」

Richard Karban, Mikaela Huntzinger, Ian S. Pearse ［瀧本　岳・吉田丈人（監訳）・内海俊介・塩尻かおり・瀧本　岳・吉田丈人（訳）］丸善出版，2026 年 8 月刊行，3200 円（税別）

これは一言でいうと，若手生態学研究者向けに学位取得や生態学を生かせる職種への就職をめざすうえで著者たちが重要と考える行動指針・研究指針を自らの経験をもとに説いた本である。同じ自然史科学だがおもに分類学畑で仕事し 5 年も前に退職した私などは著者（訳者）たちが想定する読者対象からは大はずれのはずだ。だが，私がもつ多くの未発表データの中には内容が昆虫生態学に属するものもあり，私はそれらの論文化という宿題をいまだ抱えている。だが，近年の生態学分野の論文には私には理解が追いつかない統計手法が増えている。本書にはそれらの解説も少なからず含まれるようだったので，学び直したいという気持ちで本書を手にとった。第 1 著者による Science や Oecologia の論文を昔読んだ記憶があった（著書も持っているはずと思ったがこれは記憶違いだった）ことも読みたい気持ちを後押しした。

本書で説かれる行動指針の多くは，かつてであれば所属研究室の経験深い先輩院生陣の背中をみたり，同僚と情報交換したり，あるいは学会で発表したり，人の発表を聞いたり，といった経験を通じて，自ら身につけてゆくべき性格のものだったはず（こんな言わずもがなを書く必要があるのか），というのが私の率直な感想である。著者たちも，研究の暗黙の基本ルールの明文化だと書いている（153 ページ）。米国のみならず，日本でも私が学生・院生だった頃（1970 年代後半〜80 年代前半）と比べると今では院生を抱える大学の数は増えたかもしれないが，規模が小さくて手本になるような経験深い先輩院生に恵まれなかったり，大きな大学でも実力のある先輩院生がさっさと他大学に異動するなどして手本となる研究者があまり滞留しないシステムになり先輩から学ぶ機会が減っていたりするのかもしれない。もしそうであれば，本書は若い研究者には，それなりに励みと学位取得や研究関連ポスト獲得のための行動指針を学ぶためのよい道しるべとなるだろう。

ここで語られる行動指針はおもに仮説検証型の生態学を念頭においているが，自然史的生態学（著者らによれば 1960 年代には廃れたそうだ。これから離れた生態学には私は魅力を感じないが）でも定量的観察やそこから発見されたパターンとそこから導かれる仮説に対する統計テストは欠かせない。またここで語られる研究の暗黙の基本ルールなるものの多くは生態学のみならず，生物学の他分野でもおそらく共通だと思うので，専門が生態学でない若手院生・学生にも得られるところは種々あるだろうと思われる。

第 3 章「生態学の仮説を検証する」，第 4 章「生態学における統計の利用」，第 5 章「定量的観察を用いてパターンを見る」では生態学でよく用いられる仮説検証のためのデータの取り方や統計手法を解説している。だが，この部分で私が期待した最近流行の統計手法（ベイズ統計とかメタ解析など）についての解説はとても短く，私には肩透かしだった。適用例をボックスで示すなどして，どのようなデータがあればそれが適用できてどのようなことが言えるようになるのか，といった説明が欲しかった。また，説明のための例があまり適切でないと思われるものが散見されたことも残念だった。たとえば，問いを明確にし検証可能な作業仮説を立てることの一例として「パンダがいない場合よりもパンダがいる場合のほうが（竹に寄生する）ゾウムシの密度は低くなる」（31 ページ）というものがあるのだが，どのような論理でそのような仮説が導かれるのかの説明がない。それがないため，私にはこれが明確な問いだとは思えない。また，30 ページには，明確な問いや仮説をもつことの重要性を示す例として，脚注に日本がかつてやっていた調査捕鯨が明確な問いをもたなかったため国際司法裁判所から調査捕鯨の中止を命じられたというエピソードが書かれている。これが適切な例だとは私はまったく思わないし，そもそも大多数の日本人にはこのような例を挙げられることは不愉快でしかないだろう（水産庁による現在の商業捕鯨についての説明は十分に合理的だ）。著者らに説明してこの部分は訳書では削除してもよかったのではなかろうか。

第 8 章「発見したことを伝える」では論文執筆，口頭発表，ポスター発表，研究費申請書の書き方のポイントがうまくまとめられている。これらを扱った書籍は数多くあり，とくに真新しい内容があるとは思わないが，重要ポイントはあらかた要領よくまとめられているので本書のこの章は十

分に役立つ。研究費申請の留意点をまとめたあと，「研究費を得られるか得られないかにかかわらず，自分にとってもっともエキサイティングな問いを選んでください。そうすれば，おのずと，研究を成功させるのに十分なハードワークができるでしょう」と締めくくっているのも好感をもてた。

以上のように一部に問題と感じる部分があるものの，これから研究を始めようと考えている若い人にはめざす分野が生態学であればもちろん，他の生物学分野であっても，参考になるところはきっとあり，自己啓発本として十分に役立つのではないだろうか。若手の学生・院生のみなさんには広く一読をお薦めしたい。

鶴崎展巨（鳥取大学　名誉教授）